扉口装置の変遷と幣軸の成立 (上)

奈良時代までの辺付と幣軸

THE CHANGE OF THE APPARATUS OF DOORFRAME AND
THE COMPLETION OF HEIZIKU PART 1

Henzuki and heiziku until Nara period

平山育男*

Ikuro HIRAYAMA

This studied the change of the apparatus of doorframe till Nara period.

- There were the thick board as the pivot and heiziku formerly. First, nagesi was a member of holding the windowframes, later became the pivot and structural. So the thick board became disused.
- Heiziku took over the function of hentuki. The first, using heiziku around door was Kondô in Tôsyôdaizi-temple. Because heiziku had flat only on the front, the pivoting part had been square section.
- The first, nagesi as the pivot was Kairô in Hôryûji-temple. Pivoted doors by kabuki-nagesi and han-nagesi was established at Gozyû-no-tô in Daigoji-temple at least.

Keywords; in Nara period, hentuki, heiziku, karadomen, Hôryûji-temple, Tôsyôdaizi-temple
奈良時代、辺付、幣軸、唐戸面、法隆寺、唐招提寺

1. はじめに

扉については比較的多くの論文・著書¹⁾が著されているが、扉を支える設備である扉口装置²⁾の変遷の研究は少ない。その中で天沼俊一が『史林』の「日本古建築研究之棗」³⁾に著した藁座⁴⁾、幣軸⁵⁾の研究は形態の変遷を通史的にまとめた唯一無二のものと言ってよい。ところで同シリーズの方針は古建築の部材に注目して時代順に整理・説明することであったため、部材毎の様式的な変遷や、部材・細部による年代判定を行う上では格好の書とはなった⁶⁾が、それは「様式手法の研究」⁷⁾に始終し、各時代における部材の形式と特徴は事細かく示されるものの、新しい形式が生み出された理由やその機能的な意味に関する記述は少なかった。それは幣軸の記述にも見ることができ、各時代における代表的な幣軸や辺付の形式はことごとく示されるものの、変遷の理由や成立の背景についての記述は少ない。

ところで扉口装置に古くは辺付⁸⁾があり、幣軸との関係は早くから指摘されていたが⁹⁾、具体的な関係は天沼も上述の論文では述べてはおらず、両者の関係が解明されたとは言い難い¹⁰⁾。

一方、天沼以後、古代の建立になる建造物の発掘や解体修理工事も大幅に進み精緻な調査結果が得られたが、藁座、幣軸に関してはその成果を反映した研究は少ない。著者はこれまでに奈良時代までの建築物等に見られる原始的な藁座の特徴をまとめたが¹¹⁾、本研究では

更に扉口装置の幣軸を中心に、成立と変遷を鎌倉時代までの遺構を中心に考察する。このうち本稿では奈良時代までの遺構について述べるが、既に形式的な変遷等は天沼の論文や各建物の修理工事報告書等に詳しいため¹²⁾、本文ではこれらの記述は必要最少限のもののみとし、主には幣軸の時代における意義と形式変遷の理由を中心に、建物全体との関係にも留意しながら考察を進める。

なお、本文では原則的に各建物における辺付、幣軸などの部材名称は修理工事報告書を初めとする既往の研究によった。

2. 奈良時代までの扉口装置と辺付、幣軸

1) 辺付と軸釣・軸受となる厚板¹³⁾

扉口装置には先行的に原始的な藁座の様な部材が見られたが、これに代わり普及したのが法隆寺金堂(奈良県、持統7、8・693、4頃にはある程度完成¹⁴⁾)に代表される形式である。これは柱間上下の軸釣・軸受となる厚板の左右柱際へ辺付と呼ばれる厚板を建て箱枠を造り、その内側に上下の楣・蹴放と左右の方立を組み込んで扉を納める。この構成から判断すると辺付は、扉口の枠組であるとともに、辺付と扉との間にできる隙間を塞ぐ方立を支えるための装置と判断されるが、この場合、方立を受けるのは辺付で幣軸は用いられない¹⁵⁾。法隆寺金堂では木太い柱の自重、足元的地覆長押の利用により軸

本論文は、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)1997年9月及び1997年日本建築学会関東支部研究報告集で発表した内容に新たな知見を加え論述したものである。

* 長岡造形大学造形学部環境デザイン学科
助教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Environmental Design, Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr. Eng.

組の安定を図るため、頭貫は柱に落とし込まれているだけで力学的な役割は少なく¹⁶⁾、長押も窓上下の窓枠材としての利用に留まり構造材としての働きは未だない。更に、長押には板扉を支える材としての役割も無く、板扉の建て込みには専用の部材として軸釣・軸受となる厚板が使われたと考えるべきだろう。法隆寺金堂と同様の納まりは法起寺三重塔(奈良県、天武13~慶雲3・684~704)¹⁷⁾、法隆寺東院伝法堂(奈良県、奈良時代¹⁸⁾)¹⁹⁾にあり、法隆寺五重塔(奈良県、和銅4・711以前²⁰⁾)では扉上方の軸を台輪に納める類似の形式を見ることができる。また、この他にも奈良時代までに建立された建物では昭和19(1944)年に焼失した法輪寺三重塔(奈良県、持統朝の後半から文武朝の前半頃²¹⁾)²²⁾、法隆寺東室(奈良県、上限天智天皇9・670~下限天平19・747²³⁾)²⁴⁾、唐招提寺講堂(奈良県、天平宝字4・760~同6・762移築²⁵⁾)²⁶⁾が法隆寺金堂等を参考に扉口装置の復原がなされている²⁷⁾。なお、この時代の倉には正倉院(奈良県、天平勝宝8・756頃²⁸⁾)²⁹⁾、東大寺本坊経庫(奈良県、天平時代³⁰⁾)、手向山神社宝庫(奈良県、奈良時代³¹⁾)、唐招提寺宝蔵(奈良県、天平時代³²⁾)、同経蔵(奈良県、天平時代³³⁾)があるが、扉口はいずれも上下を幅広の地覆、冠木、左右を太い方立で枠を組み、この中に蹴放、楣を入れ、内開きの扉を地覆、冠木に吊り込むが、これは軸釣・軸受となる厚板を用いる納まりと原則的には同じ働きと言える。

ところで法隆寺金堂で扉口装置の軸釣・軸受となる厚板の取り付けは軸部と同時の建て込みであったが、直後の法隆寺五重塔では楣が隣接する柱間窓楣と一木で、見込みが薄くなるものの、軸部の組立後の造作となり³⁴⁾、法起寺三重塔に至り柱際に刃付を建てた上に冠木を組込み、頭貫が楣を兼ねることはなくなった³⁵⁾のであるが、このように目まぐるしい変更は軸釣・軸受となる厚板に限ったものではなく、当時の事情をよく伝えるものとも言えよう³⁶⁾。

なお、法隆寺玉虫厨子(奈良県、7世紀後半の第3四半期頃³⁷⁾)を初めとするこの時代の厨子はいずれも牒番金具により扉を受ける構成で³⁸⁾、実際の建築物とは異なる。

2) 長押の採用

さて、法隆寺廻廊(奈良県、天平19・747以前³⁹⁾)においても刃付は用いられる⁴⁰⁾が、扉の建て込みには軸釣・軸受となる厚板でなく長押を使った早い例である。ただし、断面形状⁴¹⁾から判断すると長押は造作材の域を出ていないとするのが妥当であるが、結果として総ての柱間の内外に長押が打たれ、軸部が固められたことは注目すべきである。同様に各柱間内外を長押で固め、扉の建て込みに刃付・長押を用いた納まりには法隆寺東院夢殿(奈良県、天平11・739)、大神神社摂社大直禰子神社社殿内陣(奈良県、宝亀元・770以前⁴²⁾)⁴³⁾があり、類似の形式には法隆寺経蔵(奈良県、天平19・747以前⁴⁴⁾)⁴⁵⁾がある。このように窓枠だけでなく板扉の建て込み、更に軸部を固める構造材として長押が次第に活用された結果、軸釣・軸受となる厚板は急速に姿を消したようである。

一方、薬師寺東塔(奈良県、天平2・730)初層裳階扉口装置は刃付を用いずに扉脇の柱が方立を受け、長押により板扉を建て込む早い例で、やや時代は下がるが確実な例では醍醐寺五重塔(京都府、天曆6・952)までには内法長押―地長押内側に置いた冠木長押―半長押に板扉を据える方法が確立されたといえよう⁴⁶⁾。また、法隆寺東大門(奈良県、天平時代の古い時⁴⁷⁾)のように、門では内法高さの長押が冠

木長押となり、後に定型化を見たとすることができるだろう⁴⁸⁾。

ところで、法隆寺廻廊では刃付と柱との間に小壁を置き、同様に法隆寺東院夢殿では15.40尺の1辺に7.67尺の扉口を設けるため、柱際に小壁を設けて小柱を建てた後に刃付を置いて楣・蹴放・方立を組込む工法⁴⁹⁾が採られている。

3) 幣軸と長押による方法

扉口装置の変化は軸釣・軸受となる厚板に止まらず、刃付にも及んだ。ただし、既に述べたように、内外別材とする刃付が用いられる法隆寺中門(下層)扉口の現状形式は慶長修理によるもので、当初は一材の刃付と推定される⁵⁰⁾。また、外側にいわゆる唐戸面⁵¹⁾形式の堅幣軸が入る東大寺法華堂正堂(奈良県、天平19・747頃)背面中央間の形式は鎌倉時代の造作による⁵²⁾とされるため、ここではいずれも除外して考えなければならないが、法華堂正堂でこれ以外の部分の刃付⁵³⁾は部材が古く、当初材と考えられている⁵⁴⁾。ところで、法華堂正堂では背面中央間を除く刃付はこれ以前の遺構と同様、柱際に配置され、外見は矩形の形態であるのだが、旧来のものとは異なり、材は方立を挟み内外別の2材からなる。この変化は外側からは見分けることのできない極めて微細なものではあるが、部材が扉の両脇にのみ置かれ方立を支えるという点は、従来の刃付と共通する形態や配置、働きを巧妙に受け継ぐ一方、同時にここで見られる、方立を内外の2材で支えるという働きは、後述する一般的堅幣軸とも全く同じであることを考えれば、これは刃付が幣軸に変化する兆しと考えるべきであろう。なお、元興寺極楽坊五重小塔(奈良県、天平時代⁵⁵⁾)初重板扉脇の柱際では、解体修理によって外周だけに刃付の外観を持つ材⁵⁶⁾に復原されているが⁵⁷⁾、これが当初の形式を示しているとすれば、上と同じ考えによったと考えることができるだろう。

また、栄山寺八角堂(奈良県、天平宝字年間・757~765)では上下の長押間に建てられた板扉両脇の堅幣軸⁵⁸⁾が方立を内外から支える。ただし、他に類例のない大面取の形状等から判断してこれを幣軸と呼ぶにはやや躊躇も感じるが、内外別材の形態は東大寺法華堂正堂の技法と共通の働きと考えられるが、一方、大面取の形態を後の丸面や唐戸面と類似の形式と見なせば、材の配置や機能は堅幣軸とも全く同じであることを見出すことができるのである。なお、この幣軸の大面については、厚板形式の刃付に類似する未発達形式⁵⁹⁾とする考えと、“八角柱に取付く幣軸は八角柱の斜辺を表現した大面になった”⁶⁰⁾、との見解が並立する。また、以下に示す丸面を持つ幣軸の形式は既に中国・唐時代の建築手法に見られ、日本の形式はその影響と考えるのが妥当との意見もある⁶¹⁾。

新薬師寺本堂(奈良県、天平時代⁶²⁾)では板扉の建て込みを上は冠木長押、下は唐居敷とし、扉両脇には丸面の施された幣軸を置く。この幣軸を当初とする確証はないが⁶³⁾、この材は内外1材(現在は内外別木とする⁶⁴⁾)で扉の左右だけに置かれる堅幣軸の形式で、見付け(正面側)にのみ平滑面を持ち、これと丸面の間に段差を置くなど刃付と共通する形態的な特徴も多く有する⁶⁵⁾。

以上より、この段階における幣軸は見付けのみに平滑面を持つに留まる。また、幣軸は刃付から出発したため、刃付が果たした方立を支えるという機能、扉の左右2方に限られる取り付け箇所等の性格を巧妙に継承したと考えてよいだろう。

さて、この時代、既に丸面を施した幣軸を扉の左右上3方に廻した建物を見ることができる。小規模な建築では海竜王寺五重小塔(奈良県、天平年間・729～749)がある。幣軸が当初からであるかの判断は難しいが、現状では扉がなく、幣軸は正面側にのみ平滑面を有する断面形状の部材が外側のみに配される⁶⁶⁾。そして、本格的な堂宇では唐招提寺金堂(奈良県、宝亀年間・770～780⁶⁷⁾)が挙げられる⁶⁸⁾。

唐招提寺金堂において柱間装置の位置は当初以来変更なく、身舎前面列の中央5間と背面中央間を板扉両開、他を連子窓とする。正面の扉口は内外に幣軸を配し(背面は外側のみ⁶⁹⁾)、現状で正面中央の3間では幣軸の内側に漆喰塗の小壁、方立脇柱を建てて方立・楣・蹴放とし、その両脇間では幣軸の内側に羽目板(小板壁)を建て、方立・楣・蹴放とする⁷⁰⁾。ただしこの変則的な構成も堂内部各柱間の扉軸吊材に旧の軸吊穴が幣軸の直近にあることから、方立脇柱などの装置は中古の改変⁷¹⁾で、当初は幣軸のすぐ内側に方立を建てて(中央間で見付け幅1尺、その脇間では8寸程度)楣・蹴放を置き、現状より幅の広い扉を吊っていたとする⁷²⁾。

さて幣軸の形式は、各正面扉口とも外側では丸面の両側に段差を置き、見付け・見込みともに平滑面を有する、いわゆる唐戸面の形式の幣軸を扉の左右上3方に廻す。一方、内側は扉両脇のみに幣軸を置く堅幣軸の形式で、上框だけを半長押とし、堅幣軸の断面形状は丸面で、見付け方向のみに段差と平滑面を有する形式である。ただし、外側の形式は中古の改変によるもので、当初材では見込みの平滑面が別材で矧付けてあるため、元来はこの平滑面がなく、丸面の部分が直接方立に接していたとする⁷³⁾。

即ち、唐招提寺金堂正面幣軸の当初形式は、外側が扉の左右上3方に部材を廻し、内側は堅幣軸で、断面形状はいずれも見付けのみに平滑面を有する形式とまとめることができるのである。

ところで、この堂では内開きの板扉を堂内側に建て、軸受は地長押とするが⁷⁴⁾、軸吊は丸面を有する幣軸が扉を吊り込むのではなく角材で半長押の形状を持つ部材となる。何故、ここに外側と同じく丸面を有する幣軸様の部材を用いなかったのであろうか。

恐らくその理由は、この堂に用いられた幣軸の断面形状そのものに由来するのであろう。

唐招提寺金堂の当初形式では、上述のように幣軸には見込みに平滑面を持たない断面形状の材を廻す。類似の形状を持つ幣軸は新薬師寺本堂等にも見られるが、この建物でも幣軸は堅幣軸に留まり、内開きの扉を吊る堂内側の軸吊は内法長押になっている。見込み面に平滑面を持たない幣軸に扉を吊るとすれば丸面の部分に扉軸を吊ることになるが、そうするとこの時代の幣軸は丸面が円弧に近いため、扉の軸が外れやすく、扉の軸が見えてしまい、見た目の納まりも悪い。つまり、見付けのみに平滑面を有する幣軸の断面形状は、軸吊材としては唐戸面の場合に比べて極めて不利な形態といえるわけである。従来、この見付けのみに平滑面を持つこの形式は古式を示すものとは説明されてきた⁷⁵⁾が、同時にこれは扉を建て込むためには未発達な形態とも言わざるを得ない。つまり、この堂ではその弱点の故に、板扉を吊る堂内側上方の部材だけには丸面を施さず、半長押の形状に止めたと考えるのが妥当であろう。

このように扉口装置としての辺付の急速な変化のため、奈良時代以後における辺付の利用は前身建物の材を再用したと考えられる法隆寺東院舍利殿及び絵殿の舍利殿背面扉(奈良県、承久元・1219)

⁷⁶⁾などの建物に限られたものと考えられる。なお、教王護国寺慶賀門(京都府、鎌倉時代前期)、同北大門(同)⁷⁷⁾には外見が辺付の形状を有する部材が用いられている。

以上のように、奈良時代までにおける辺付及び幣軸の変遷は様式的な面に限れば、奈良時代には“飛鳥直系のものもあるが、建築技術の発達につれ、幣軸も相當に進歩して片繰出(中略)ができたし⁷⁸⁾”た、と天沼の言うようにまとめることもできるであろうが、その変遷の理由は天沼が記す辺付・幣軸自体の自律的な進歩によるものではなく、上で見てきたように、扉口装置として辺付・幣軸が本来有する、いかに扉を吊るのかという、方法や機能自体と密接に関連し、更には軸組を固める方法やその部材である長押などとも深く関係するものであったと言える。

補論 辺付の語の発掘と辺付・幣軸の呼称について

1) 「辺付」の語の発掘

「辺付」の語は正倉院文書の整理による発掘され、明治36(1903)年8月刊『大日本古文書 巻五』⁷⁹⁾で初めて活字化がなされた⁸⁰⁾。明治39(1906)年6月刊『日本建築辞彙』文末の「建築語及文字に就て」⁸¹⁾はこの語に着眼した極めて早い例で、既に「辺付」を“「へんづき」又は「へりづき」と唱へそれより轉じて後世の「へいちく」といへる言葉が出来たならんか”⁸²⁾とするが、幣軸の語自体は“疑はしき言葉”⁸³⁾として扱い、“目草、敷見、杵立、と共に記しある故出入口用の木ならん”⁸⁴⁾として、具体的にはどのような部材を指すものかの断定はなされていない。

一方、正倉院文書の建築史分野における研究は昭和8(1933)年から福山敏男によって行われた石山寺等の造営に関するものが著名で⁸⁵⁾、ここで整理された資料等により、昭和11(1936)年、関野克は在信楽藤原豊成殿板殿の復原⁸⁶⁾を行った。ここで「辺付」は扉口周囲の部材と復原されたが、一部に不審な点⁸⁷⁾もある。

また、実際の建物では昭和3(1928)年、天沼俊一は古建築の修理に携わった知見から⁸⁸⁾、法隆寺中門・金堂・塔婆の「辺付」が後の幣軸であるとの結論を得た⁸⁹⁾が、これを「辺付」と呼称するには至っていない。結局、昭和18(1943)年、法隆寺東院伝法堂の復原で浅野清が柱際の部材に「辺付」の名称を宛てたのが最も古く、これにより奈良時代における扉廻りの手法が明らかにされた⁹⁰⁾。

2) 辺付・幣軸の呼称と名称

正倉院文書に記される辺付のうち戸の調度としては3カ所(大日本古文書編年文書5巻254頁:天平寶字6・762年7月21日⁹¹⁾、15巻226頁:同年正月15日、16巻197頁:同年閏12月29日)、単に辺付としては2カ所(5巻119頁:同年2月30日条、5巻148頁:同年3月25日条)記されるが、いずれもほぼ同寸法の杵立と並んで記されることが特徴である。また、辺付は窓の部材としても使われる(5巻254頁:同年7月21日条、15巻226頁:同年正月15日、16巻197頁:同年閏12月29日)が、ここでは杵立が用いられず、敷見(敷居、闔)とは無関係な寸法の部材である。このほか同文書には「辺直」なる部材も記される(15巻219頁:同年正月15日)が、杵立と並列されることから辺付と同種の材と考えられる。つまりこの時代、「辺付」と「辺直」の名称が並列してあったわけである。なお、呼称について福山敏男は「辺直」に“へツキ”の訓みを提案している⁹²⁾。

この後、治承3（1179）年6月の『東寺損色検注帳』⁹³⁾ 食堂に
立平軸一丈一尺 方尺
の記載があり⁹⁴⁾、今のところ管見ではこれが最も古い平（幣）軸の
用例である。また鎌倉時代末、嘉元造替時の賀茂上社に関する史料
とされる『乾元二年癸卯御造宮宝殿寸法表』⁹⁵⁾には“たてへいち
く”（縦幣軸）のほか、上幣軸に“かぶきへいじく”（冠木幣軸）、
敷居に“へいちくのしきい”なる語句を見ることが出来る。

辞書類では、平安時代末の『色葉字類抄』（前田本）⁹⁶⁾「辺」（
へ）の部、「地儀」⁹⁷⁾に“辺付へッ”の語が収められる。ただし、
平安時代中期の『倭名類聚抄』の本などでは、その構成が分類体と
なり、扉は「門戸具」に分類されるが、既にこの時代に門では辺付・幣
軸が原則的には用いられなかったためであろうか⁹⁸⁾、ここに辺付・
幣軸の語を見ることはできない。

木割書の類では慶長15（1610）年の奥書を持つ『匠明』⁹⁹⁾に“平
軸”“幣軸”¹⁰⁰⁾の語があり、上方の幣（平）軸には“横平軸”の語
を宛てている¹⁰¹⁾。このほか漢字表記では延宝5（1677）～宝永（
1710）頃の『建仁寺派家伝書 匠用木割』に“屏軸”、同じく『建
仁寺派家伝書 層塔』に“瓶じく”¹⁰²⁾とある¹⁰³⁾。読みは『鎌倉
造営名目』で天正3（1575）年とされる三チウノトウメウもく（三
重塔名目）に“へいちく”、寛永15（1638）年12月のしゅうろうのミ
やうもく（鐘楼名目）に“へいちく”¹⁰⁴⁾とある。なお、同書の一
間社を初めとする記述では幣軸の見付けの平滑面を“むかう”、円
弧状の部分“をまるめ”、見込みの平滑面を“へり”とする。

小 結

本稿では奈良時代までの扉口装置の変遷を考察してきたが、これ
らは以下のようにまとめることができる。

（１）扉口装置として法隆寺金堂を初め、古くは専用の軸釣・軸
受となる厚板材とともに辺付があった。長押は当初、窓枠を支える
ための材であったが、後に扉の建て込み、更には構造材としても使
用されるようになり、軸釣・軸受となる厚板材の利用は廃れた。

（２）東大寺三月堂において辺付はその働きを受け継ぎながら内
外別材となって扉両脇に置かれ、栄山寺八角堂など面を持つ縦幣軸
の形式も見られるようになった。本格的な堂宇として初めて左右上
3方に幣軸が用いられた唐招提寺金堂で扉軸吊となる室内側上部の
材は角材に止まったが、それは当時の幣軸が見付けのみに平滑面を
持つ断面形状で、軸吊材としては不利な形態のためであった。この
形式は古式を示すものとしては従来説明されてはきたが、同時に扉
を建て込むには未発達な形態であった。

また、扉口装置としての長押は以下のようにまとめられる。

（３）上下とも長押による扉口装置は法隆寺廻廊に初見例があり
少なくとも醍醐寺五重塔までには冠木長押、半長押により板扉を支
える形式が確立された。なお、門では冠木長押の形式が後に定型化
された。

注 記

- 1) 高橋康夫:物語ものの建築史 建具のはなし、鹿島出版会、昭和60(1985)年12月など。3、6頁に建具全般、史料等の文献が記される。
- 2) 扉を支えるだけの装置であれば「軸吊・軸受装置」とすべきだが、辺付、縦幣軸とも方立は受けるが軸吊・軸受の機能はない。また、“扉構え”では扉が中心との印象がある。そこで、本稿ではこれらの総称として“扉口装置”の語を用いる。
- 3) 連載第2回目以後は「日本古建築研究の葉」とされた。以下本文でこの連

載全体を総称する場合は「日本古建築研究の葉」の名称を用いる。

- 4) 天沼俊一:日本古建築研究の葉(第二十五回)第三十一 葦座、史林13-1、107~139頁、昭和3(1928)年1月
- 5) 天沼俊一:日本古建築研究の葉(第二十六・七回)第三十二 幣軸(上・下)、史林13-2、50~69頁、13-3、124~139頁、昭和3(1928)年4・7月
- 6) 「日本古建築研究の葉」は①天沼俊一:日本建築様式の研究、同図録、思文閣、昭和50(1975)年1月にまとめられた。村田治郎の「跋」によると“この「葉」が載りはじめてから「史林」の読者が急に増加し「中略」現に私なども新たに購読を開始した一人であった”(496頁)という。また、②天沼俊一:日本建築細部変遷小図録、星野書店、昭和19(1944)年5月、③天沼俊一:補訂日本建築細部変遷小図録、思文閣、昭和61(1986)年3月が“他日大図録編輯”(②「序」2頁)を目指し編集された。なお、②③に葦座の項はあるが幣軸の項はない。
- 7) 天沼俊一:日本古建築研究の葉(第一回)緒言、史林5-1、82頁、大正9(1920)年1月
- 8) 「辺付」の読みは①彰国社編集:建築大辞典 第2版、1517頁、彰国社、平成5(1993)年6月が「へんつけ(辺付)」、②福山敏男:正倉院文書に見える建築用語、正倉院年報8、13頁、昭和61(1986)年3月が「へツケ(辺付)」、③綜芸舎編集部編集:入門日本古建築細部語彙 社寺篇、65頁、綜芸舎、昭和45(1970)年6月が「へづけ(辺付)」で「へんづけ」と読む人もあるとし、補論2)に挙げた、④平安時代末の『色葉字類抄』(前田本、注81)は“辺付へッ”とする。本稿では一般的な「へんつけ」を採用した。
- 9) 補論1参照。注8)①建築大辞典、1517頁「へんつけ(辺付)」の項目には「へいじく(幣軸)」参照とあり、注8)③入門日本古建築細部語彙 社寺篇、65頁では「へづけ(辺付)」の項目で「へいじく」は「へづけ」の転訛というとし「へいじく(幣軸)」の項目で“辺付(へづけ)から発達したものといわれる”とある。また、注8)②福山:正倉院文書に見える建築用語、13頁では「辺附」を“今日の「幣軸」”とするが、いずれもその根拠は示されない。
- 10) 注5)天沼:日本古建築研究の葉(第二十六回)第三十二 幣軸(上)52頁では“飛鳥時代のものでは、法隆寺のほかにはない様である。當代のは中門・金堂・塔婆何れにもあるが、これ等の形は出入口兩脇の柱に添い、見付せまく見込の大きな断面長方形の木があり、上の方は薄い木で限られてゐる。この場合のこの堅の木が幣軸である。”として辺付と幣軸を同種の部材とするが辺付と呼ぶには至らず、両者の関係は記していない。なお、正倉院文書の「辺附」は注8)②福山:正倉院文書に見える建築用語、13頁に詳しい。古語としては①澤潟久孝編集:時代別国語大辞典 上代編、三省堂、650頁、昭和42(1967)年12月「辺付(著)」の項目で“岸に添う。岸に接近する”とし、類似の“へつかふ”は“寄り添うの意か”とする。建築用語の「辺付」の項は同書の本文にはないが、巻末904頁の「建物部材名称」には「辺付(へんつけ)」を挙げる。また、②丸山林平:上代語辞典、明治書院、869頁、昭和42(1967)年7月、“へつかう”の項目では、“近づきだけで、ぴったりと定着しない”「寄らず、さわらず」などの意”とする。
- 11) 拙稿:原始的な葦座について、建築史学31、153~160頁、平成10(1998)年9月
- 12) 以下、扉口装置の説明等に注を必ずしも付していないが、原則的には修理工事報告書もしくは文化庁文化財保護部建造物課の保存図に拠った。
- 13) 扉口で扉を吊り込む部材は注8)②福山:正倉院文書に見える建築用語、12~13頁によると鴨居(柄)、数見が該当する。ただし、先行する①法隆寺國寶保存委員会(編輯竹島卓一):法隆寺國寶保存工事報告書 第十四冊 國寶法隆寺金堂修理工事報告、445頁、昭和31(1956)年3月、では“軸釣、軸受”、②鈴木嘉吉:奈良六大寺大觀第一巻 法隆寺「金堂」29頁、岩波書店、昭和47(1972)年8月、では“軸釣・軸受となる厚板”とする。本稿では②に従う。なお、軸吊(り)に軸釣、軸摺などの字も充てるが、本稿ではこの語と引用を除き、日本建築学会発行:学術用語集 建築字編(増訂版)、292頁、平成2(1990)年4月により“軸吊”を用いた。
- 14) ①注13)②鈴木:「金堂」22~23頁。建造物の建立年代は注を引いたが、それ以外は、②文化庁編集:国宝・重要文化財建造物目録、第一法規出版、平成2(1990)年7月、によった。
- 15) ①注5)天沼:日本古建築研究の葉(第二十六回)第三十二 幣軸(上)52頁、は“【法隆寺の:著者注、以下同様】塔婆と中門のとは【辺付が】柱についてあるが、金堂のは少し離れてゐる”とする。厳密には法隆寺金堂ではエンタシスの曲線が強く、上部で柱との間に透き間があった。なお、中古に同書58頁、第式百図、法隆寺金堂幣軸、の写真のように柱と辺付の間を土壁とした部分もある。②注13)①附圖、28頁、第二九圖 初重平面圖 修理前、でこの部分が壁とされるのはこのためであろう。修理後は、29頁、第三〇圖 同 修理後、のように土壁は廃されたが、注13)②グラビア88頁、金堂内部組物、のように内部で透き間に木材を挿入する部分もある(この点は太田博太郎先生にご教示頂いた)。なお、法隆寺五重塔以下では辺付全体を柱の曲線に併せて光付け、柱と辺付が密着する。以上より、辺付とはエンタシスを持つ柱に方立を簡易に置くための部材とも解釈ができ、推測の域は出ないが、エンタシスの用いなくなったことが辺付から幣軸への変容の一因ともできるだろう。なお、③伝統のディテール研究会:伝統のディテール、74頁、彰国社、昭和47(1972)年3月には“【法隆寺金堂の】扉はエンタシスを持った太い柱の間に柱と関係なく、辺付けなどの枠組で組込めるようになっている”とする類似的指摘がある。
- 16) 注13)②鈴木:「金堂」26~27頁
- 17) ①浅野清:建築史論叢「法起寺及法輪寺三重塔に関する復原考」、高桐書院、昭和22(1947)年10月、1~13頁、では「法起寺塔【初重】中央間兩脇柱には邊附取付型、上方無目の取付型と見られるものあり、その方式は法隆寺塔のも

- の、如くであつたと見られる。”(7頁)とあり、この再録として②浅野清:奈良時代建築の研究 法起寺および法輪寺三重塔に関する復原考、122~134頁、中央公論美術出版、昭和44(1969)年11月、がある。また、③奈良県文化財保存事務所編集、奈良県教育委員会発行(堀内啓男分担):国宝法起寺三重塔修理工事報告書、13頁、昭和50(1975)年1月、で初重中央間柱間装置は“当初のものとみられる痕跡は刃付及び冠木がとりついた風蝕差と冠木の枘穴で、旧は上方に成の高い冠木を柱に組みこみ、両脇に刃付が立っていたことが明らかであった。方立・楣・地覆等については明らかでないので、法隆寺五重塔初重扉口に倣って復旧した”とする。
- 18) 法隆寺東院伝法堂施入年は、①浅野清:奈良時代建築の研究 伝法堂の創立・沿革および後世修理の状況、232頁、中央公論美術出版、昭和44(1969)年11月、では“天平の末年頃にすでに東院全体の工事もほぼ完成”とし、②監修文化財保護委員会、福山敏男(奥書等から福山と判断はできぬが、③太田博太郎:奈良六大寺大観第五巻 法隆寺Ⅱ 伝法堂、124頁、岩波書店、昭和46・1971年9月、の指摘に従う):国宝1、52頁、毎日新聞社、昭和38(1963)年11月、では天平宝字3(759)年の橘夫人死後あまりくだらない時期、とする。建築年代は①234頁では“少なくとも天平の初年を下るものではなく、おそらくはさらに遡る”とし、②53頁では“造営はおよそ天平年間に置いて大過がなからう”とするため、本稿では奈良時代とした。
- 19) ①法隆寺國寶保存事業部(編集兼発行者大岡實、編輯浅野清):法隆寺國寶保存工事報告書 第八冊 國寶建造物法隆寺東院舍利殿及給殿並傳法堂修理工事報告書、36頁、昭和18(1943)年3月、②浅野清:法隆寺建築綜観 傳法堂とその前身建物、287~288頁、便利堂、昭和28(1953)年8月
- 20) 鈴木嘉吉:奈良六大寺大観第一巻 法隆寺一「五重塔」31頁、岩波書店、昭和47(1972)年8月
- 21) 法隆寺三重塔の建築年代は諸説あるが、福山敏男:法輪寺の建立に関する疑問、夢殿第一二冊、165頁、昭和9(1934)年12月、では“持統朝の後半から文武朝の前半に亘る頃のもの”とされ、これによった。
- 22) 法輪寺三重塔の復原考察は、注17)①浅野:「法起寺及法輪寺三重塔に関する復原考」、注17)②浅野:「法起寺および法輪寺三重塔に関する復原考」があり①7頁では“法輪寺【三重塔初重中央間】も恐らく【法起寺三重塔、法隆寺五重塔と】同様であつたと思はれる”とあり、昭和50(1975)年再建復興はこの成果に則る。なお、焼失前は、刃付を用いず柱際に方立を置き、上下の長押が扉を吊り、軸吊材は下面を斜めにする形式であった。これは明治36(1903)年の修理工事によるものと考えられるが、その根拠は明らかでない。なお、同工事の竣工図は、西山卯三、鈴木嘉吉:法輪寺三重塔調査報告書、財団法人観光資源保護財団、昭和47(1972)年12月、20頁による。
- 23) 編集兼発行者奈良県教育委員会文化財保存課(監督技師日名子元雄、橋本文夫):国宝法隆寺東室修理工事報告書、33頁、昭和36(1961)年3月
- 24) 注23) 国宝法隆寺東室修理工事報告書、32頁
- 25) 太田博太郎:奈良六大寺大観第十二巻 唐招提寺一「唐招提寺の歴史」9頁、岩波書店、昭和44(1969)年2月ほか
- 26) 編集奈良県教育委員会事務局奈良県文化財保存事務所(監修岡田英男、執筆担当吉井博):国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書、93頁、昭和47(1972)年3月
- 27) この他では、法隆寺中門が①澤村仁:奈良六大寺大観第一巻 法隆寺一「中門」144頁、岩波書店、昭和47(1972)年8月によれば“扉構えは慶長のもので当初の装置については痕跡も明らかでないが、幣軸に隠れる柱面にも少々奥まで風蝕があり、刃付などが柱に密着しない伝法堂などのように、柱に痕跡もほとんど残さない手法の扉装置があったものであろう”とされ、刃付の使用は推定されるが、他の部材は確認ができなため、ここではその類例としての指摘を控える。なお、①にわずかの補訂を加え、②澤村仁:日本古代の都城と建築「法隆寺中門」190~203頁、中央公論美術出版、平成7(1995)年6月、がある。
- 28) 福山敏男:日本建築史研究「東大寺の諸倉と正倉院宝庫」、349~406頁、墨書房、昭和43(1968)年6月
- 29) 注28)福山:日本建築史研究「東大寺の諸倉と正倉院宝庫」によれば、正倉院は中世に落雷などで扉の造替を受けたが、大正の解体修理を除けば3扉同時の修理は記録されず、現状は当初形式をよく伝えと考えられる。
- 30) 鈴木嘉吉:奈良六大寺大観第九巻 東大寺一「本坊経庫」147頁、岩波書店、昭和45(1970)年4月。
- 31) 奈良県教育委員会文化財保護課(宝庫編集執筆脇坂俱二):手向山神社宝庫・境内末社住吉神社本殿修理工事報告書、4頁、昭和33(1958)年10月
- 32) 鈴木嘉吉:奈良六大寺大観第十二巻 唐招提寺一「宝蔵 経蔵」35頁、岩波書店、昭和44(1969)年4月
- 33) 注32)鈴木:「宝蔵 経蔵」35頁
- 34) 注13)①國寶法隆寺金堂修理工事報告、445頁
- 35) 工藤圭章:日本建築史基礎資料集成十一 塔婆 I「法起寺 三重塔」84~85頁、中央公論美術出版、昭和59(1984)年7月
- 36) 浅野清:文化財講座日本の建築 古代 I「概説」26~28頁、第一法規、昭和52(1977)年3月
- 37) 鈴木嘉吉:玉虫厨子に見る建築様式、NHK国宝への旅第20巻、129頁、日本放送出版協会、平成2(1990)年2月
- 38) この時代の厨子は、大野敏:飛鳥・奈良時代の厨子、建築史学29、平成9(1997)年9月、2~54頁に詳しい。
- 39) 澤村仁:奈良六大寺大観第一巻 法隆寺一「廻廊」46頁、岩波書店、昭和47(1972)年8月
- 40) ①注39)澤村:「廻廊」47頁、では“扉構えは内法長押の下に楣・方立・蹴放を枠組し、両側に厚板状の刃付をそえ、刃付と柱の間は小壁とする。《中略》扉構えは、いずれも金堂や伝法堂などの古い形式から刃付と枠組を造る風走・敷見を省略した形となっており、当初材は残っていないらしい”とする。この部分の表現はやや適切を欠くが、これをまとめると法隆寺廻廊では内法長押の下に楣・方立・蹴放を枠組して、両側に厚板状の刃付を用い風走・敷見を省略するものとなる。なお、①を補訂した②澤村仁:日本古代の都城と建築「法隆寺廻廊」204~214頁、中央公論美術出版、平成7(1995)年6月、がある。
- 41) 注39)澤村:「廻廊」47頁によれば“長押はいずれも丈三・二寸ほど、幅六寸ほどの角材”とする。
- 42) 編集奈良県教育委員会事務局奈良県文化財保存事務所(執筆担当岡崎彰):重要文化財大神神社摂社大直禰子神社社殿修理工事報告書、3頁、平成元(1989)年12月
- 43) 注42)重要文化財大神神社摂社大直禰子神社社殿修理工事報告書、130頁
- 44) 澤村仁:奈良六大寺大観第一巻 法隆寺一「経蔵」52頁、岩波書店、昭和47(1972)年8月
- 45) 刃付は、編集兼発行者竹島卓一:法隆寺國寶保存工事報告書 第十二冊、國寶法隆寺聖靈院修理工事報告書、134頁、昭和30(1955)年3月、復原は注44)澤村:「経蔵」53頁参照。
- 46) これ以前では奈良時代末期の当麻寺東塔などにも類例で見ることができるが、部材が当初との確認はない。
- 47) 太田博太郎:奈良六大寺大観第一巻 法隆寺一「東大門」84頁、岩波書店、昭和47(1972)年8月
- 48) 東大寺転書門にも同様の納まりを見ることができるが、現状の形式が当初のものであるとの確認はない。
- 49) 法隆寺國寶保存事業部(編集大瀧正雄、浅野清):法隆寺國寶保存工事報告書第九冊 國寶建造物法隆寺夢殿及東院回廊修理工事報告、59頁、昭和18(1943)年8月、によれば、扉口周辺では刃付断片のみが当初材として伝わりとされる。なお、夢殿で柱間口に対して約半分の広さの扉口(7.67尺/15.40尺=0.498)とするのは、高欄を有する基壇の出(7.00尺)や、扉を開いた際の扉の納まり等によると考えることができるだろう。
- 50) 現状は内外2材で、各材とも方立に接する面と反対側の面を柱面まで伸ばす納まりとする。これに対し注27)澤村:「中門」144頁では、刃付の具体的な当初の形態までは記さないが、幣軸は慶長のもので当初の装置については痕跡も明らかでないが、幣軸に隠れる柱面にも少々奥まで風蝕があり、刃付などが柱に密着しない伝法堂などのように、柱に痕跡もほとんど残さない手法の扉装置があったものであろうとする記述から、当初は内外1材からなる矩形断面の刃付と考えることができよう。
- 51) 本論文では以下、便宜的にこの面の形式に“唐戸面”の呼称を用いる。
- 52) 編集奈良県教育委員会(編集及び監修岡田英男、執筆山本克己):国宝東大寺法華堂修理工事報告書、36頁、昭和47(1972)年11月
- 53) 後述のようにこの部材は内外が別材のため刃付と呼称すべきか迷うが、①浅野清:東大寺法華堂復原考、建築史5-6、昭和18(1943)年11月、15頁、②浅野清:東大寺法華堂の研究「東大寺法華堂の現状とその復元的考察」173頁、大八洲出版、昭和23(1948)年9月、③注52)国宝東大寺法華堂修理工事報告書35頁、等の先行研究に従いこの部材を刃付と称する。
- 54) 注53) ①浅野:東大寺法華堂復原考、16頁参照
- 55) 鈴木嘉吉:大和古寺大観第三巻 元興寺極楽坊 元興寺 大安寺 般若寺 十輪院、「元興寺極楽坊 五重小塔」、19頁、岩波書店、昭和52(1977)年6月
- 56) ①編集兼発行者奈良県教育委員会事務局奈良県文化財保存事務所(本文執筆編集北村豊之助):元興寺極楽坊五重小塔修理工事報告書、昭和43年9月、ではこの部材を“縦幣軸”(9頁他)、②浜島正士:日本建築基礎資料集成十一 塔婆 I「元興寺極楽坊五重小塔」26頁、中央公論美術出版、昭和59(1984)年7月、では“豎幣軸代用の刃付”なる語を充てる。
- 57) 注56)①元興寺極楽坊五重小塔修理工事報告書、9(26)頁によれば縦幣軸の根拠としては方立の痕跡の“外寄り約1.5cmには縦幣軸を打付けた釘穴も上下二個ずつ残存していた”として、矩形的外観を呈する幣軸を復原したとする。ただし、幣軸当初材の発見の言及はなく、幣軸を矩形断面とする根拠も示されないが、本稿ではこの形式を前提に論を進める。
- 58) この呼称も後述の注59、60)等の先行研究に従う。
- 59) ①天沼俊一:榮山寺八角圓堂に就て、建築雑誌297、452頁、明治44(1911)年9月、②注5)天沼:日本古建築研究の棗(第二十六回)第三十二 幣軸(上)、52~53頁、③福山敏男:榮山寺八角堂の研究、24頁、便利堂、昭和26(1951)年8月
- 60) 澤村仁:日本建築史基礎資料集成四 仏堂 I「榮山寺八角堂」158頁、中央公論美術出版、昭和56(1981)年1月
- 61) 飯田須賀斯:中国建築の日本建築に及ぼせる影響について「開口」183~186頁、相模書房、昭和28(1953)年10月
- 62) 岡田英男:大和古寺大観第四巻 新薬師寺 白毫寺 円成寺 新薬師寺本堂、122頁、岩波書店、昭和52(1977)年2月
- 63) 注62) 岡田「新薬師寺本堂」25頁では、この面の形式を新薬師寺本堂における当初形式の特色と考えている。
- 64) 注62)岡田:「新薬師寺本堂」26頁注一八
- 65) 注5)天沼:日本古建築研究の棗(第二十六回)第三十二 幣軸(上)、53頁、によれば【新薬師寺本堂は】明治三十何年かの、古社寺保存法に據る最初の修理のとき【幣軸を】全部とりかへたと見えて材料は皆新しくなっているから、證據が残っていない。従て前例に倣ったとも、又は想像で古式を繕えてこんなのを造ったとも、どちらとも考へられる”とする。しかし岡田英男:日本建築史基礎資料集成四 仏堂 I「新薬師寺本堂」85頁、中央公論美術出版、昭和56(1981)年1月に掲載の「挿図54 修理前桁行立・断面図」の身舎正面扉口装置は中央間の上部楣が身舎柱に達する以外大きな相違はない。また、実見の限り

- 背面幣軸室内側の材は風蝕が著しく、扉が取り付くのと反対側背面に使われぬ仕口穴等もある。このためすべての幣軸材が交換を受けたとは考えられず、幣軸は明治31(1898)年修理前の形式を踏襲すると推定される。
- 66) ①岡田英男：大和古寺大観第五巻 秋篠寺 法華寺 海龍王寺 不退寺「海龍王寺五重小塔」100頁、岩波書店、昭和53(1978)年3月では「幣軸はかなり古い、初めからこのような納まりであったか明らかでない。《中略》新楽師寺本堂より様式手法も年代も古いこの小塔の扉口に幣軸が当初から用いられていたか疑問がある。」とする。ただし、②岡田英男：日本建築史基礎資料集成十一 塔婆 I「海龍王寺 五重小塔」25頁、中央公論美術出版、昭和59(1984)年7月、註25では「奈良時代のなかでも古い手法を持つこの小塔に当初から唐戸面取りの幣軸が用いられたかどうか、はなはだ疑問である。内法長押がないのに幣軸を廻した二重以上の手法も納まりの不自然なものであり、別に柱盤に扉軸穴もあるで、幣軸の材はかなり古そうであるが、中世の修理の時の補足と考えられ、当初は幣軸を用いていなかったであろう」とするが、この間にこの件についての明確な証拠が発見されたとの論拠は示されていない。なお、この建物は扉がなく、扉軸を納める問題は生じない。
- 67) ①太田博太郎：奈良六大寺大観第十二巻 唐招提寺「唐招提寺の歴史」116頁、注13、岩波書店、昭和44(1969)年2月、によれば唐招提寺金堂の建立年代は天平宝字3(759)年当初(天平宝字7・763年の鑑真没以前ということで天平宝字頃・757～765年を含む)、宝龜(770～780)年間、延暦(782～806)年間、弘仁(810～824)年間の各説とする。本稿では②鈴木嘉吉：奈良六大寺大観第十二巻 唐招提寺「金堂」19頁、岩波書店、昭和44(1969)年2月、の「宝龜年間とするのが妥当であろうとする説が有力である」によった。
- 68) 唐招提寺金堂の当初形式の復原考察は①浅野清：唐招提寺金堂復原考、建築史6・4、1～31頁、昭和19(1944)年7月、②奈良国立文化財研究所編集(金堂の建築は鈴木嘉吉)：奈良国立文化財研究所年報1961、唐招提寺総合調査概要「金堂 建築」5頁、昭和36(1961)年10月、③浅野清：唐招提寺の金堂、仏教芸術64、28～47頁、昭和42(1967)年5月、④浅野清：奈良時代建築の研究「唐招提寺金堂」115～117頁、中央公論美術出版、昭和44(1969)年11月、⑤の再録、なお以下の引用は断りのない限り①による、がある。また、これらの成果を受け⑤鈴木嘉吉：奈良六大寺大観第十二巻 唐招提寺「金堂」19～25頁、岩波書店、昭和44(1969)年2月、⑥澤村仁：日本建築史基礎資料集成四 仏堂 I「唐招提寺 金堂」115～125頁、中央公論美術出版、昭和56(1981)年1月、などがまとめられた。なお、唐招提寺金堂の幣軸が本格的な堂宇における最古の例とする記述は上掲⑥121頁に見られる。
- 69) 背面扉口幣軸の復原は注68)の各研究でも具体的には触れられず不明のため本稿では正面の幣軸を中心に記述する。なお、注68)⑥澤村：「唐招提寺 金堂」掲載の現状図等では、背面の幣軸は唐戸面を有する幣軸が外側の3方に廻され、内開きの板扉を室内側の内法長押と地覆長押に直接軸穴を設けて廻り込むなど、正面とはやや異なる納まりとなる。
- 70) 部材名称は注67)④浅野：「唐招提寺金堂」115頁によった。
- 71) 注68)⑥澤村：「唐招提寺 金堂」119頁、によれば、造作の変更は文永7(1270)年の修理時とする。また、注68)②奈良国立文化財研究所年報1961、「金堂 建築」5頁によれば、更に元禄の修理で外部に面する長押、幣軸、方立等を一度解き放し、表面を削り直したとする。
- 72) 注68)①浅野：唐招提寺金堂復原考、4頁。なお、扉幅を狭めた改造の理由は正面扉を開けた場合、扉と須弥壇の間隔が狭くなり過ぎるためであろうか。
- 73) 注68)⑤鈴木：「金堂」25頁、注4では「外側の縦幣軸のうち当初材は唐戸面の奥の見込み方向の平らな部分が別木で剝付てあり、元来はこの平らな部分がなく直接方立に唐戸面が接していたことを証する。」とする。また、注68)①浅野：唐招提寺金堂復原考、4頁、では「元は幣軸のすぐ内に《中略》方立がついていたのみであったこと、《中略》又【方立を】かく復原する時外側幣軸内方の平な面は方立に隠れることになるので(現に上方の幣軸のこの面は楣に重つて隠されてゐる)、外側幣軸も恐らく現に内部に使用されてゐる如く、方立に接する側に平な面のないものであつたらう。」とする。
- 74) 注68)④浅野：「唐招提寺金堂」116頁では「【扉の】下方では現在の長押上にただちに扉をのせているが、長押の背は一尺五寸におよび、旧長押の取り付け痕跡を隠してしまっている。もちろん、もとは一重長押を用いたか、二重長押を用いたか、あるいは地覆を用いたか明らかではない。しかしおそらく少なくとも戸口以外の間では地覆を用いたであろう」とする。また、根拠は示されないが、注68)⑥澤村：「唐招提寺 金堂」23頁、では「法隆寺金堂や伝法堂では長押上に半長押(敷見)が乗り、ここに軸穴が設けられるが、必ずしも同じとは限らない。唐居敷ではないであろう」とする。
- 75) 注5)天沼：日本古建築研究の栞(第二十六)第三十二 幣軸(上)、53頁
- 76) 注23)①國寶建造物法隆寺東院舍利殿及繪殿並傳法堂修理工事報告書、76頁で、舍利殿背面の辺付は「恐らく前身建物の戸口部材を再利用し、これに多少の補正を行つて出来たものと察せられる」とするが、前身建物の復原資料として発見された辺付の断片は柱際に接して置かれるなど「多少手法を異にし、【現在の舍利殿背面】扉に「承安」の年號の記されてゐること等と合はせ考へても、これは比較的後に補足されたものと思はれる」(163頁)とする。
- 77) 京都府教育庁指導部文化財保護課編集(監修加藤勉、本文執筆塚原十三雄)：国宝・重要文化財教王護国寺蓮花門/北大門・慶賀門・北給門修理工事報告書、平成7(1995)年3月、の図面によるといずれも外形は辺付の形態であるが、慶賀門は前後2材で面を有し、北大門は背面を削り抜くL字形断面の材で慶賀門の補足材(56頁第二図)である。
- 78) 注5)天沼：日本古建築研究の栞(第二十六)第三十二 幣軸(上)、53頁。引用の《中略》には「又は両線出つきの」語が入る。これは金堂幣軸外側の形態を指すが、天沼の執筆時には注68)等の復原研究はなく、天沼もこの点は「唐招提寺金堂は鎌倉時代に手が入っているのだから、外側のだけはその時分

- にかえたのかも知れない」と考えていたため、この部分を略した。
- 79) 東京帝国大学編集：大日本古文書 巻五、明治36(1903)年8月
- 80) 正倉院文書が建築史で重視されたのは神宮司庁編集『古事類苑 居処部』明治45(1912)年3月に転載後であろう。なお同書に「辺付」の紹介はない。
- 81) 中村達太郎：日本建築辞彙、丸善、明治39(1906)年6月
- 82) 注81)中村：日本建築辞彙「建築語及文字に就て」22頁
- 83) 注81)中村：日本建築辞彙「建築語及文字に就て」20～23頁。同書では辺付(邊附)等、正倉院文書の言葉を中心に、用途が明らかでない用語を「疑はしき言葉」の項目に掲載して説明を加えている。
- 84) 注81)中村：日本建築辞彙「建築語及文字に就て」22頁
- 85) 福山敏男：奈良朝に於ける石山寺の造營、實雲第5・7・10・12、昭和8(1933)年2月・同9月・昭和9(1934)年8月・昭和10(1935)年5月。これに僅少の補訂を加え、福山敏男：日本建築史の研究「奈良時代に於ける石山寺の造營」309～436頁、桑名文星堂、昭和18(1943)年10月、として刊行された。
- 86) ①関野克：在信楽藤原豊成殿殿復原考、建築学会論文集3、76～85頁、昭和11(1936)年3月、②関野克：在信楽藤原豊成殿殿復原考、實雲20、15～38頁、昭和12(1937)年8月
- 87) 注86)①関野：在信楽藤原豊成殿殿復原考、には復原図(平面図、立・断面図)、②関野：在信楽藤原豊成殿殿復原考、には復原構造図解(透視俯瞰図)、復原図(模型写真)が掲載されるが、辺付・方立は見付面を材長辺とし疑問が残る。これは伊勢神宮の「ゆきはしら」を念頭にした復原であろうか。
- 88) 天沼の経歴は、天沼香：ある「大正」の精神—建築史家天沼俊一—の思想と精神—、昭和57(1982)年12月、吉川弘文館、に詳しい。
- 89) 注10)天沼の引用部分参照
- 90) 注19)①東院舍利殿及繪殿並傳法堂、36頁参照
- 91) 以下、大日本古文書編年文書に掲載巻、頁、掲載年月日を記す。なおこれらは関根真隆：正倉院古文書(大日本古文書編年文書第一巻～第二五巻)物名索引(建築部材関係項)、正倉院年報8、38～48頁、昭和61(1986)年3月、による。
- 92) 注8)②福山：正倉院文書に見る建築用語、13頁
- 93) 東寺損色検注帳、宮内庁書陵部蔵。本文は、竹内理三：平安遺文 古文書 第八巻3879、2969～2980頁、東京堂、昭和38(1963)年12月訂正版、による。
- 94) 同史料による復原は、上野勝久：平安時代の東寺食堂の形態について、日本建築学会計画系論文集459、119～128頁、平成6(1994)年5月、に詳しい。
- 95) 乾元二年癸卯御造營宝殿寸法表、賀茂別雷神社蔵。本文は、谷重雄：上賀茂神社嘉元造營の本殿、建築史2・4、295～316頁、昭和15(1940)年7月、による。
- 96) 橘忠兼：色葉字類抄、天養—治承(1144～1180)頃の成立。本文は、中田祝夫・峯岸明編集：色葉字類抄研究並びに索引、風間書房、昭和39(1964)6月による。
- 97) 日本大辞典刊行会編集：日本国語大辞典 第十三巻、332頁、小学館、昭和51(1976)年1月、によれば本来「地儀」とは「山・川・海・陸などの形象。地形。地理。」を指すが、色葉字類抄の巻頭「伊」(い)の部「地儀」には「付居処并居宅具」とあり、同書では建築(住宅・家具)用語も「地儀」に分類される。
- 98) 本論文の(下)で詳述するが、門一層扉口に辺付・幣軸を用いる例は少ない。辺付は法隆寺中門、教王護国寺慶賀門、北大門にある。幣軸は法隆寺中門正面の南大門(奈良県、永享10・1438)等に堅幣軸、春日大社慶賀門、清浄門、内侍門(いずれも奈良県、永徳2・1382～至徳2・1385)、園城寺大層下層(滋賀県、宝徳4・1452)等に左右上3方の形式がある。なお、楼門上層に幣軸を用いる例では光明寺二王門(京都府、宝治2・1248)が左右上3方、石上神社楼門(奈良県、文保2・1318)が堅幣軸とするなど幾つかの例が見られる。
- 99) ①平内政信、平内吉政：匠明、慶長15(1610)年。転写時期は②太田博太郎監修・伊藤腰太郎校訂：匠明五巻考、鹿島出版会、昭和46(1971)年12月、304頁で「元禄十年〔一六九七〕以降で《中略》享保十二年〔一七二七〕以前と推定したい」とする。
- 100) 匠明は99)②太田監修、伊藤校訂：匠明、による。「平軸」の語は堂集記の三間四面堂之圖、「幣軸」は殿屋集の装束妻戸の項目に掲載される。
- 101) 注100) 匠明殿屋集、装束妻戸の項目参照。
- 102) いずれも、甲良宗賀・宗俊・宗貞編集：建仁寺派家伝書、延宝5(1677)～宝永(1710)頃、東京都立中央図書館蔵。なお、執筆の年代推定及び本文はいずれも、河田克博編集：日本建築古典叢書第三巻 近世建築書—堂宮雛形2 建仁寺流、大龍堂書店、昭和63(1988)年12月、による。
- 103) このほか①明治前日本科学史刊行会編集、乾菴松：明治前日本建築技術史「木割」、日本学術振興会、昭和36(1961)年3月、所載の大工斗墨曲尺之次第(「造神宮使庁蔵書」堂作りに「幣軸」の語がある。同書は「桃山時代を下らぬものと思われる」(同書286頁)されるが、原文は乾氏による改変があり、利用には慎重を要するとされる。この点は②渡辺保弘：「孫七寛書」との比較による原本「大工斗墨曲尺之次第」島居木割の復原考察—1. 検証の方法と冒頭部の考察—、日本建築学会計画系論文集366、95～104頁、昭和61(1986)年8月、に詳しい。また、③永井康雄、飯淵康一：庄内藩大工棟梁小村家旧蔵の慶長期以前の木割書に見られる三間社について、日本建築学会技術報告集5、263～268頁、平成9(1997)年12月、の慶長19(1614)年「門形宮形形式」「やしろの目録」に「へいちく」の語がある。
- 104) 筑口成書・河内吉左衛門書写：鎌倉造營名目、三チウノトウメイもく(三重塔名目)、天正3(1575)年書・慶安5(1652)年8月書写。本文は、鎌倉市教育委員会編集、関口欣也ほか：鎌倉市文化財総合目録—建造物編—、昭和62(1987)年3月、による。このほか「五ちうノトウノメウもく」(五重塔名目)、天正10(1582)年正月書・慶安5(1652)年9月書写に「へいちく」、「三門カクノ事」(三門閤事)、寛永11(1634)年6月に「へいちく」、「一間社」、延宝4(1676)年5月に「へちく」などある。

(1999年5月6日原稿受理、1999年10月1日採用決定)